

IV-193 記念碑的景観についての一考察

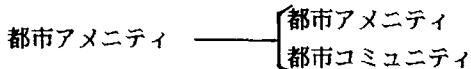
岩手大学工学部 正会員 安藤 昭
岩手大学工学部 正会員 ○ 赤谷 隆一

1. まえがき

現在危機に瀕している盛岡城からの眺望は、かつて啄木によって「不來方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心」とも詠まれたところで、これまでずっと市民にとっての豊かで忘れがたい記念碑的景観(memorial scape)であった。さてどのようにすればこの記念碑的景観を守り育てることができるかを考えるとき、まず記念碑的景観とは何かがわからなければならない。本論はこの記念碑的景観とは何かを考えるためにヨーロッパの都市三大眺望地を取り上げ、都市アメニティ評価分析モデルによって分析したものである。

2. 都市アメニティの概念

小川博三は「都市とはある地域の核をなし、あるいは自ら核となって地域を構成する地人一体の相である」と定義した。ここに地とは物的環境のことであり、人とは人間社会のことである。この定義によれば都市環境の分析に際してはまず環境(人—物の関係、極言すれば美)と人間社会(人—人の関係、極言すれば愛)の二つの視点から一体的に(尽きることないものとして)探る必要があることを教えている。この二つの視点からの都市の認識とは換言すれば都市アメニティからの認識の必要性を述べているにほかならない。したがってここでは、アメニティを次のように考えるものとした。



すなわち都市アメニティを広義と狭義の意味で解析し広義のアメニティはアメニティとコミュニティをいれゆるハードな都市の快適環境とソフトな都市共同体の2つの意味を含むものとし、狭義のアメニティは単に物的快適環境を意味するものとする。

3. 都市アメニティ評価分析モデル

ここでは人間居住の総合的環境について次のような視点、すなわち都市アメニティ(都市の快適環境)と都市コミュニティ(都市共同体)の2つの尺度で接近するものとし、I軸を都市アメニティ、もう1つの軸(II軸)を都市コミュニティとして2軸を交差させて、都市アメニティ評価分析モデルを描き出した(図-1)。

図-1の第I軸においては右に行くにしたがって景観に重点を置き、左に行くにしたがって空間に重点を置く都市環境を意味し、第II軸においては上に行くにしたがってコミュニティに重点を置き、下に行くにしたがってプライバシーに重点を置く社会的・人間的環境を意味する。

この分析モデルから4つのタイプの都市環境が描かれる。①緑空間 ②機能的空間、③歴史的景観、④パーソナル景観(個人によって類型化、評価の異なる都市景観要素)である。

図-1において第2象限の空間は人間の生存と生活にかかわる条件を象徴的に表現する空間であり、第4象限の景観は主体によりいくつかの代替反応を引き起こす多様な意味を内包する。したがって都市に個性と興行きをもたらす景観であり、第1象限の市民の共通の思い出となるような景観は市民の共有する文化についての記憶を呼び起こすよすがとなる景観であり第3象限の空間は主体の孤独にかかわる要件を象徴的に表現する空間である。

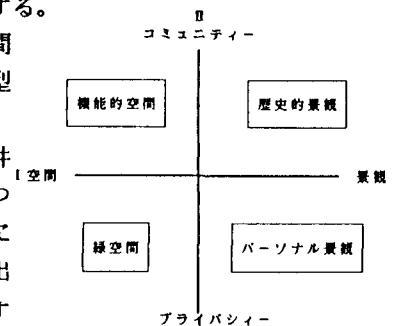


図-1 都市アメニティ評価分析モデル

さて機能的空間、パーソナル景観、歴史的景観、そして緑空間のこの4つのタイプの都市環境が美的形式原理にもとづいたひとつの風景として、つまりバランス良く形式的に統一された眺めとして与えられると、空間・景観のありように“主体の仮想の参加を通じて”豊かで確かな意味の脈絡が生じ、風景の深さと密度を高める。この風景をここでは市民にとって豊かで忘れがたい景観という意味で記念碑的景観（memorial scape）と呼ぶことにする。

図-1の分析枠組みによって示されるように記念碑的景観は人間・社会的背景と密接な関係にあることがわかる。

4. ケーススタディ

ヨーロッパの3大眺望地、哲学者の道からのハイデルベルグの市街の眺望（西ドイツ）、ミケランジェロの丘からのフィレンツェの市街の眺望（イタリア）、ベルヴェデーレ宮からのウィーンの市街の眺望（オーストリア）を取り上げ分析すると次のように示される。

4-1 哲学者の道からのハイデルベルグの市街の眺望

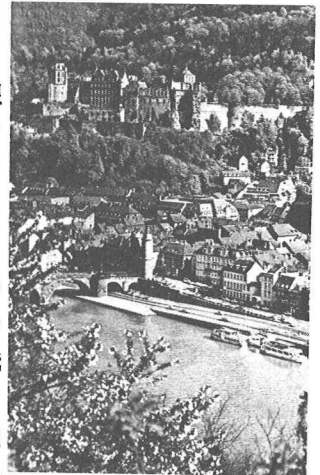
ハイデルベルグはライン川の支流ネッカー川の左岸にできた人口13万の小都市である。旧市街は市の東端部に位置し広場をかこんで後期ゴシックの教会、市庁舎がありこれらの付近に歴史的建築物がある。ハイデルベルグ城はこの広場に接するところの南傾斜の丘の中腹にそびえる。写真-1（A）はネッカー川対岸の丘の中腹哲学者の道からの市街の眺望である。山河に抱かれた近景・中景領域の街並が古城によって統一され、しかも行きかう舟や自動車が手にとるようにわかる距離であるので生活感のある景観となっていることがわかる。また散策道が視点場となっているので道に沿って歩くことによって眺望の変化を楽しむこともできる。視点場（緑空間）は風景の外にあると考えることもできる。

4-2 ミケランジェロの丘からのフィレンツェの市街の眺望

フィレンツェはアルノ川べりを発祥地とする人口46万の中都市である。写真1-（B）はアルノ川対岸のミケランジェロの丘からの市街の眺望である。アルノ川を近景とし美しいアペニン山脈を背景とする街並がサンタマリア寺を核心としてまとまっていることがわかる。フィレンツェは歴史的建造物がとても多いので、博物館都市的に形式的に統一されているように見える。ここからは市民の陽気で圧倒されそうなエネルギーも感ずることができる。視点場（広場）は風景の外にあると考えることもできる。

4-3 ベルヴェデーレ宮からのウィーンの市街の眺望

ウィーンは人口160万の大都市である。写真1-（C）はベルヴェデーレ宮（現在美術館）からのウィーンの眺望である。視点場が風景の中にある場合であるが、離宮を核心として多くの教会が添景をなし背景に低い山並をいただいたヒューマンな眺めとなっている。



（A）哲学者の道からのハイデルベルグの市街の眺望（西ドイツ）



（B）ミケランジェロの丘からのフィレンツェの市街の眺望（イタリア）



（C）ベルヴェデーレ宮からのウィーンの市街の眺望（オーストリア）

写真-1 ヨーロッパ三大眺望地

参考文献

- 小川 博三 著：都市計画， 共立出版 1978年
 中村 良夫 著：風景学入門， 彰国社 1982年
 大山 陽生 他著：緑空間の計画技法，中公新書 1984年